石神遺跡 SD1347A・B 出土の土器群

ー石神遺跡第 14 次

1　はじめに

飛鳥・藤原地区考古第二研究室では、石神遺跡出土土器の整理を順次進めており、その成果を報告してきた[1)]。昨年は、石神遺跡第 14 次調査区の南北素掘溝 SD1347A から出土した土器群を報告し、その特徴をまとめた（『紀要 2022』。以下、前稿と表記）。その後、第 14 次調査区 SD1347A の上層にあたる埋立土の土器群や、SD1347A の埋め立て後に新たに掘削された SD1347B 出土土器群の再整理を進め、SD1347A から SD1347B までの連続的な飛鳥Ⅳの土器群を得るに至った。このため本報告では、これらの土器群を報告する。

同調査区においては、SD1347A・B の堆積が比較的厚く残っていたため、層毎の精密な発掘調査が可能であった。このため、石神遺跡第８・９次調査区に比べてより精度の高い土器の定量データを取得できた。これにより、以前報告した石神遺跡第８・９次調査区の SD1347 から出土した土器群に見出した統計的・型式的変化の方向性を検証することがようやく可能となった。本報告の目的は、以前の報告においてすでに見出した諸傾向を検証し、石神遺跡における土器群の変遷をより確度の高いものにすることである。

2　南北溝 SD1347 の概要

石神遺跡南部の第３～８次調査区で検出した南北溝 SD640 は、第８次調査区のほぼ中央において西北西に 14 mほど屈折し（東西溝 SD1346）、再び北へ延びる。南北溝 SD1347 は屈折部分より北の区間を指し、その北端は山田道南側溝 SD4275・4285 に接続する（図 56）。SD1347 はかねてより基幹排水路と考えられ、北で西にやや振れる。

南北素掘溝 SD1347A は最大幅約 2.4 m、第 14 次調査区北壁における深さは約 0.5 mである。第 14 次調査区では、SD1347A の埋土は大きく下層・中層・上層に大きく分かれる。詳細は『紀要 2022』に記した[2)]ので割愛するが、上層は SD1347A を埋め立てた整地土（埋立土）であり、SD1347A の流路よりもやや幅の広い範囲に堆積していた[3)]。SD1347A が埋め立てられた後、わずかに東側にずらして南北石組溝 SD1347B が掘削された。第 14 次調査区の中央付近で SD1347 を横断する断割トレンチの土層図から、SD1347B は幅 1.7 m程度、調査時には深さ 0.2 m程度しか残存していなかったことがわかる（図 57）。SD1347B の埋土もまた、下層・中層・上層に分けられた。下層・中層は任意の区分であり、青灰色から灰褐色の粗砂からなる。本報告ではこれらを「下層」

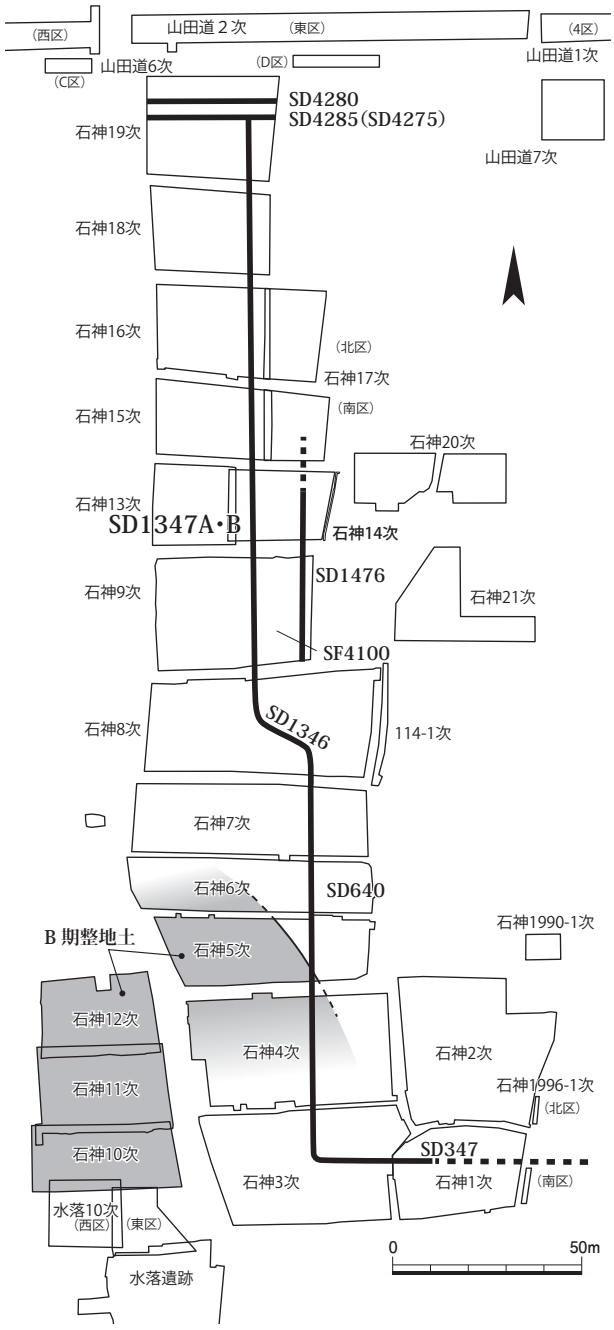

図 56　石神遺跡調査区と SD1347A・B の経路　1：2000

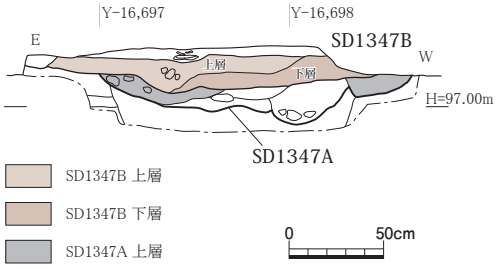

図 57　石神遺跡第 14 次調査区中央部 SD1347 北壁土層図　1：40

として一括する[4)]。上層は、炭化物が混じる灰色砂質土からなる。下層は機能時の堆積土、上層は埋立土と考えられる。

3　SD1347A 上層出土土器

第 14 次調査区の SD1347A 上層から出土した土器は、整理用木箱 21 箱分および整理用コンテナ 12 箱分である。破片数で総計 5,745 点（土師器 4,435 点、須恵器 1,310 点）を数える[5)]。SD1347A 下層と同様に、土師器に対する須恵器の出土比率が顕著に低い特徴がある（前稿）。このうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約 27％、計 1,566 点（土師器 1,092 点、須恵器 474 点）であった。土師器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、鉢Ａ、鉢Ｂ、鉢Ｃ、鉢Ｈ、大型鉢、高杯Ａ、高杯Ｃ、高杯Ｇ、貯蔵具に壺Ｂ、煮炊具に甕、鍋、甑、竈がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約２：１である。須恵器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｇ、杯Ｇ蓋、杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯蓋、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、椀Ａ、鉢Ａ、鉢Ｄ、鉢Ｅ、鉢Ｆ、盤、高杯があり、貯蔵具に壺Ａ、壺Ａ蓋、細頸壺、平瓶、瓶、横瓶、甕がある。須恵器では、供膳具の比率が全体の約 80％に達する。この他、ロクロ土師器の杯小片が３点みられた。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約 21％（約 77°）、須恵器で平均約 33％（約 118°）を示している。SD1347A 下層出土土器群と比べると、土師器の口縁部残存率はこれに及ばないが、須恵器の口縁部残存率はやや良好である。

土師器（図 58）　１～４は杯Ａ。口径[6)]が 150㎜未満の小型（１）と 150㎜以上 175㎜未満の中型（２～４）に概ね分けることができる。径高指数は、小型品（１）が 23.8 と浅手である一方、中型品（３・４）がそれぞれ 30.1、31.5 とやや深い。１・３・４は、底部外面をヘラケズリし、口縁部外面にはヘラミガキを施す。これらの内面には二段放射暗文がみられ、１の底部内面には螺旋暗文を施す。２は底部外面をヘラケズリし、口縁部外面をナデで仕上げる。内面にはやや幅広の一段放射暗文がみられる。

５～ 12 は杯Ｃ。口径が小さいほうから、① 120㎜未満（５）、② 120 ～ 140㎜（６～９）、③ 150 ～ 160㎜（10・11）、④ 170㎜以上（12）に概ね分かれ、②がもっとも多い。径高指数は、①が 25.7、②の平均値が 24.1（中央値 22.4、最大値 29.1、最小値 21.0）、③の平均値が 24.8（10 が 26.1、11 が 23.5）、④が 24.5 である。ただし、８と 10 の径高指数は他資料よりも大きく、それぞれ 29.1、26.1 を示す。ヘラケズリによる底部外面の仕上げ（７・10 ～ 12）は口径 150㎜以上の大型品に顕著である一方、口径 140㎜以下の小型品では底部外面を不調整として指頭痕を残すもの（５・６・８・９）が一般的である。５・８の底部内面には螺旋暗文がみえる。12 の内面には左上がりの一段放射暗文を施す。

13・14 は杯Ｇ。底部外面に指頭痕を残す。15・16 は杯Ｈ。底部外面をヘラケズリし、外面に顕著な屈曲がみられる。

18 ～ 21 は皿Ａ。口径は 205 ～ 240㎜に収まる。底部外面をヘラケズリするもの（19・20）と、指頭痕を残して軽くナデ調整するもの（18）または不調整とするもの（21）がある。19 は他に比べてやや深手である。20 の底部内面には螺旋暗文がみられる。

22 は皿Ｂ。復元口径は 185㎜とやや小ぶりである。内面に一段放射暗文をともなう。外面をナデ調整で仕上げる。17 は皿蓋。復元外端径 292㎜。頂部外面に細かいヘラミガキを施す。

23 は鉢Ａ。口縁部および胴部外面に横方向のヘラミガキを密に施す。内面には、一段放射暗文が部分的にみられる。復元口径 256㎜。

24・25 は鉢Ｈ。いずれも底部外面をヘラケズリする。25 は口縁部が短く、器壁がやや厚い。

26 は大型鉢。底部外面にヘラケズリを施し、口縁部から底部外面にかけて横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には二段放射暗文がみられる。復元口径 338㎜。

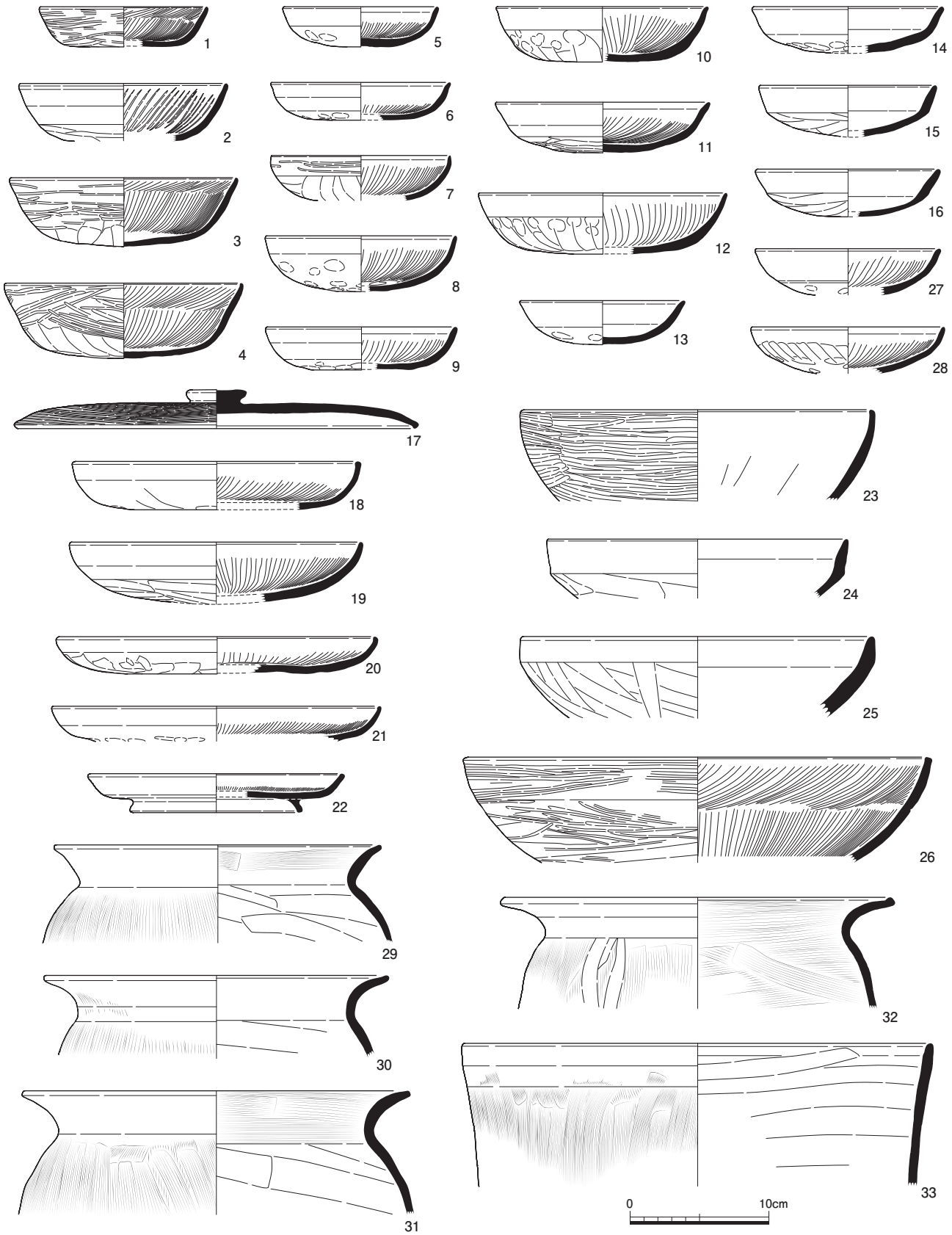

図 58　南北溝 SD1347A 上層出土土師器　1：4

27・28は高杯Ｃ。脚部は欠損するが、杯部の外形から高杯と判断した。27は底部外面に横方向の段がみられ、これよりも下位に指頭痕を散発的に残す。復元口径134㎜。28は底部外面下半に左上がりのナデを施し、底面には指頭痕を残す。復元口径140㎜。いずれも内面には一段放射暗文を施す。

29～32は甕。いずれも胴部外面をタテハケで調整する。胴部内面は、29～31では横方向のヘラナデで仕上げ、32ではヨコハケにより調整する。30を除き、口縁部内面にはヨコハケを施す。

33は甑。胴部外面にタテハケ、胴部内面に横方向のヘラナデを施す。

須恵器（図59・60）　51～56は杯Ａ。口径が小さいほうから、95～110㎜（51～53）、130～160㎜（54・55）、199㎜（56）に分かれ、比較的小型品が多い傾向がある。底部外面をヘラ切り後にナデを施すもの（51～54）と、ロクロケズリで仕上げるもの（55・56）があり、後者は比較的大型である。56は口縁部の複数箇所に淡い煤痕が残ることから、灯明器として利用されたと考えられる。

57～62は杯Ｂ。口径が小さいほうから、103㎜（57）、135～159㎜（58～60）、177㎜（61・62）に分かれる。底部外面は、ロクロケズリで仕上げるもの（59・61・62）が目立ち、他に、ヘラ切り不調整とするもの（58）とヘラ切り後にナデを施すもの（60）がある。57は底面が欠損し調整は不明であり、口縁部外面に薄い降灰がみられる。59は転用硯であり、底部外面に墨痕が残る。61の口縁部外面には薄い降灰がみられる。なお、61・62はその形態的特徴と質感に鑑みて、尾張産の可能性がある。

34～50は杯蓋。34～43はかえりをもつ杯蓋、44～50はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、図示した資料中では113㎜（34）が最小値、171㎜（43）が最大値であり、149～165㎜（35～42）に集中する。38の外面には薄い降灰がみられ、41・43の外面には自然釉が降着する。37・40の内面には墨痕を残し、このうち37は転用硯と考えられる。かえりをもたない杯蓋の口径は140～155㎜（44～48）に集中し、この他に180㎜前後の大型品（49・50）がある。44の口縁端部外面には重ね焼きの痕跡あり。48・49の外面全体には薄い降灰がみられ、49では一部で自然釉の降着も観察できる。

63は皿Ａ。復元口径266㎜。口縁部下半から底部外面にかけてロクロケズリで仕上げる。

64は皿Ｂ。復元口径262㎜。底部外面をロクロケズリで仕上げる。

65～67は椀Ａ。口径は、65が134㎜、66が166㎜、67が172㎜であり、66のみが実測値である。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。なお、66は他に比べて深手である。67は、その形態と質感に鑑みて、尾張産の可能性がある。

68は鉢Ｄ。８世紀によくみられる器種であり、７世紀では希少である。外面は、胴部下半から底部にかけてロクロケズリで仕上げる。底部内面には不定方向のナデを施す。８世紀の資料は平底であるが、68は丸底の可能性がある。

69は鉢Ｆ。胴部外面下半はロクロケズリで仕上げ、胴部内面下半はナデにより調整する。外面には部分的な降灰がみられる。

70は壺Ａ。肩部にやや大きめの耳状把手が付く。肩部外面全体に降灰がみられ、部分的に釉化する。71は壺Ａ蓋。頂部はロクロケズリにより仕上げたと思われる。外面全体に自然釉が薄く降着する。頂部内面にヘラ記号あり。

72は細頸壺の口頸部。全体に強めのロクロナデが施される。内外面全体に自然釉が薄く降着する。

73～77は甕。73は外反する口縁部をもつ甕。74・75は外反する口頸部と内側に屈曲する口縁端部をもつ甕。74は、胴部外面をロクロナデ、胴部内面をヘラナデにより仕上げる。外面には自然釉がやや厚く降着する。75は、胴部外面を平行タタキの後にカキ目調整し、胴部内面には同心円状の当て具痕がみられる。76は内彎する口縁部と平坦な口縁端部をもつ甕。胴部外面は平行タタキおよび格子タタキがロクロナデにより磨り消され、胴部内面も工具痕がロクロナデにより磨り消されている。77は直立する口縁部をもつ甕。胴部外面には、平行タタキの後にカキ目が施され、胴部内面には同心円状の当て具痕をロクロナデにより磨り消した痕跡が観察できる。工具痕の磨り消しに鑑みて、76・77は尾張産の可能性がある。

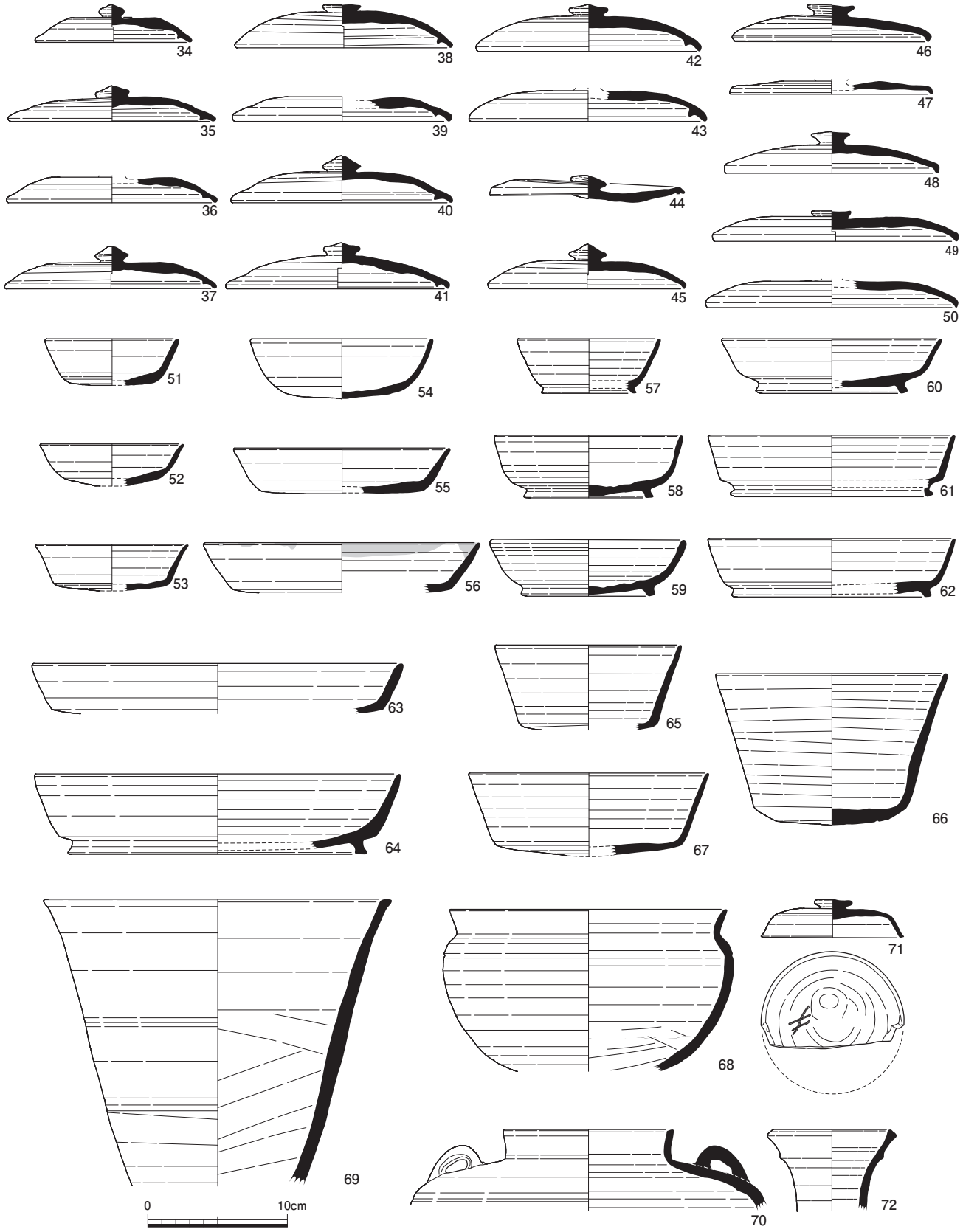

図 59　南北溝 SD1347A 上層出土須恵器（1）　1：4

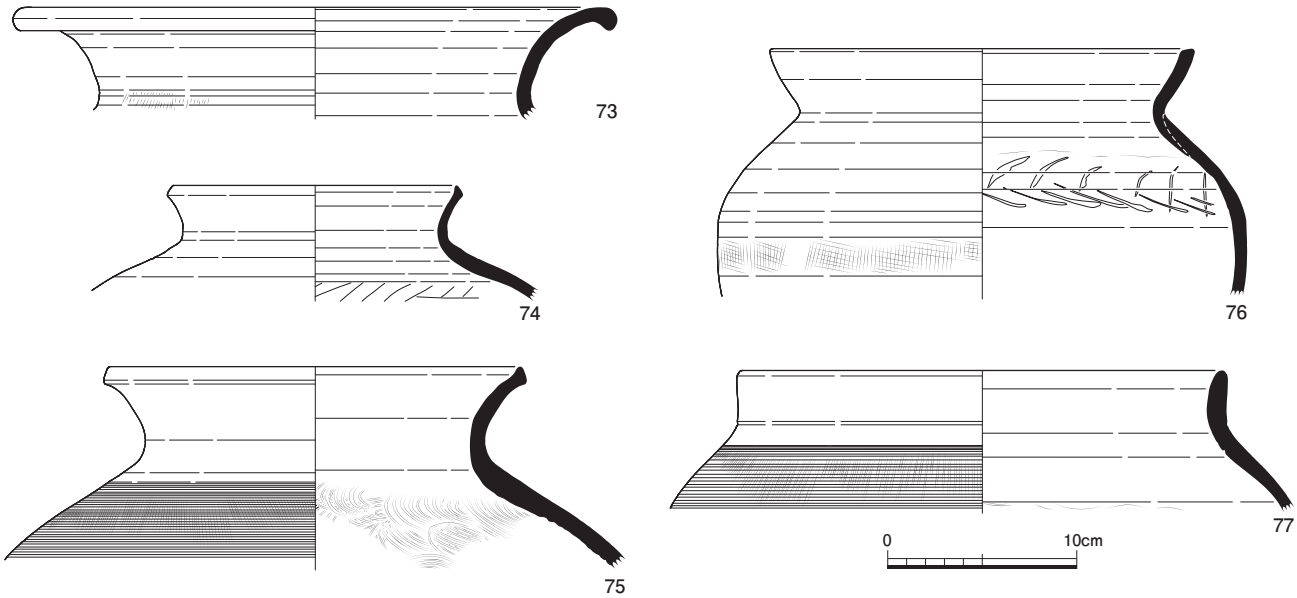

図 60　南北溝 SD1347A 上層出土須恵器（2）　1：4

4　SD1347B 下層土出土土器

第 14 次調査区の SD1347B 下層から出土した土器は、整理用コンテナで 81 箱分である。破片数にもとづくと、出土土器は総計 14,958 点（土師器 10,829 点、須恵器 4,129 点）を数える。SD1347A 埋立土とはやや異なり、土師器に対する須恵器の出土比率がわずかに増加している。これらのうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約 26 %、計 3,880 点（土師器 2,474 点、須恵器 1,406 点）であった。土師器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、皿Ｃ、鉢Ａ、鉢Ｃ、鉢Ｈ、大型鉢、高杯Ａ、高杯Ｃ、高杯Ｇ、高杯Ｈ、盤Ａ、貯蔵具に壺Ａ、壺Ｂ、煮炊具に甕、鍔甕、鍋、甑、竈がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約３：２である。須恵器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｇ蓋、杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯蓋、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、椀Ａ、椀Ｂ、鉢Ａ、鉢Ｅ、鉢Ｆ、盤、高杯があり、貯蔵具に壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｋ、長頸壺蓋、平瓶、瓻、横瓶、提瓶、甕がある。須恵器では、供膳具の比率が全体の約 89％と極めて高い。この他、ロクロ土師器が 28 点認められた。すべて供膳具であり、須恵器の杯Ｂ、杯Ｈ蓋、鉢Ａに相当する器種を含む。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約 23％（約 83°）、須恵器で平均約 23％（約 81°）を示す。SD1347A 上層出土土器群と比較すると、土師器の口縁部残存率はほぼ同等であるが、須恵器の口縁部残存率はより低い。

土師器（図 61・62）　81 ～ 86 は杯Ａ。口径が 124㎜の小型品（81）と口径 160 ～ 185㎜の中型品（82 ～ 86）に分類可能である。径高指数は底部まで残存する３点（81・82・85）から得られた。81 と 85 がそれぞれ 24.8、20.9 と浅手である一方、82 は 27.7 である。残存する外形に鑑みて、83・84・86 の径高指数は 82 の数値と近いと思われる。85 はかなり浅手であり、杯Ｃにも分類できそうであるが、口縁端部の形状や口縁部の立ち上がりから杯Ａに分類した。図示したすべての杯Ａの底部外面はヘラケズリされており、85 を除き、口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。85 では、口縁部外面には横方向のナデのみが施される。内面には二段放射暗文が施されるが、85 では一段放射暗文がみられる。81・84 の底部内面には螺旋暗文がみられる。

78 ～ 80 は杯蓋。いずれもつまみは現存しない。復元外端径は、159㎜（78）、176㎜（79）、188㎜（80）である。外面は、78・80 がヘラミガキ、79 がヘラケズリにより調整する。

86 ～ 103 は杯Ｃ。口径が小さいほうから、① 115 ～ 124 ㎜（86・87）、② 125 ～ 144 ㎜（88 ～ 97）、③ 145 ～ 165㎜（98 ～ 102）、④ 170㎜以上（103）に概ね分けられるが、

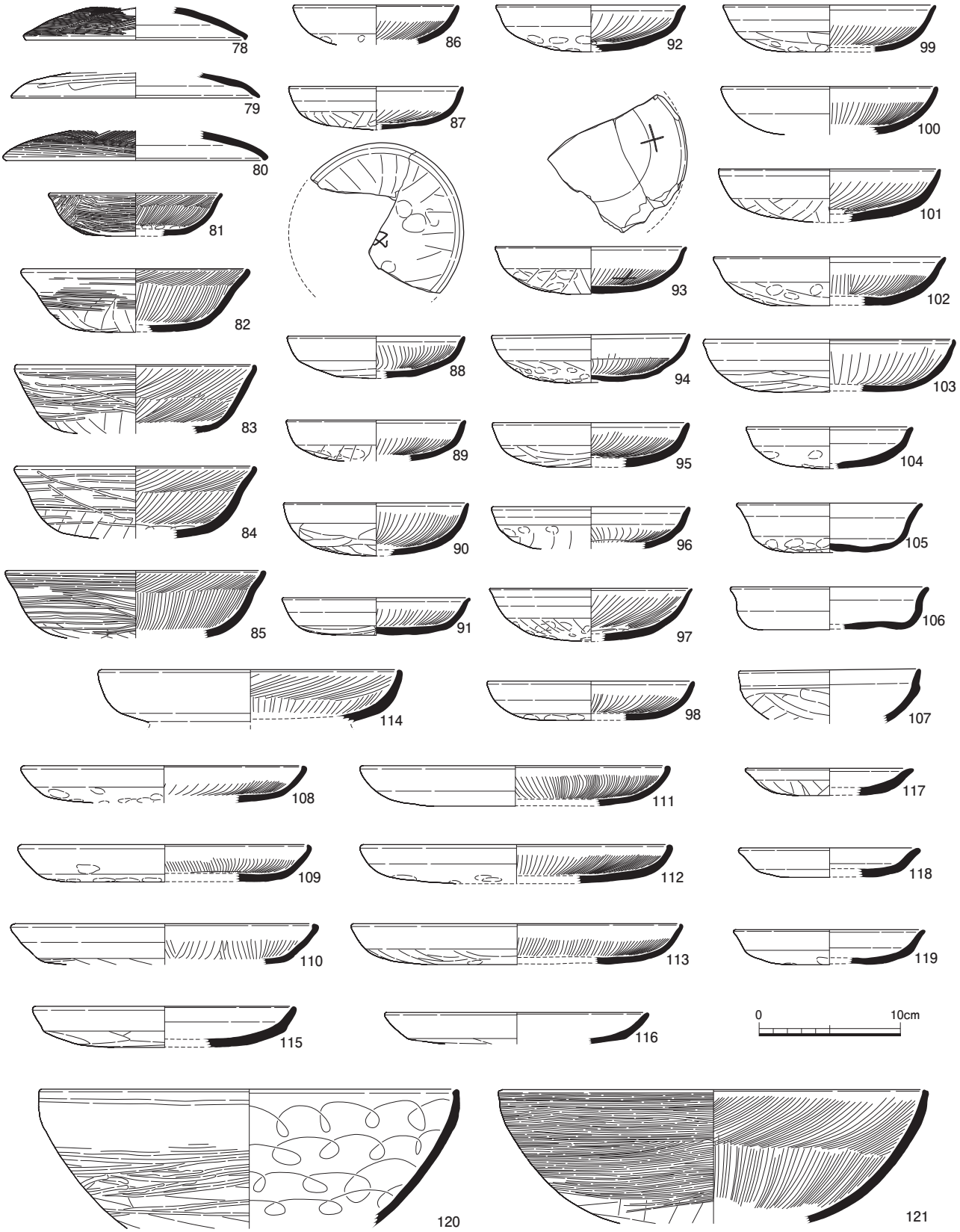

図 61　南北溝 SD1347B 下層出土土師器（1）　1：4

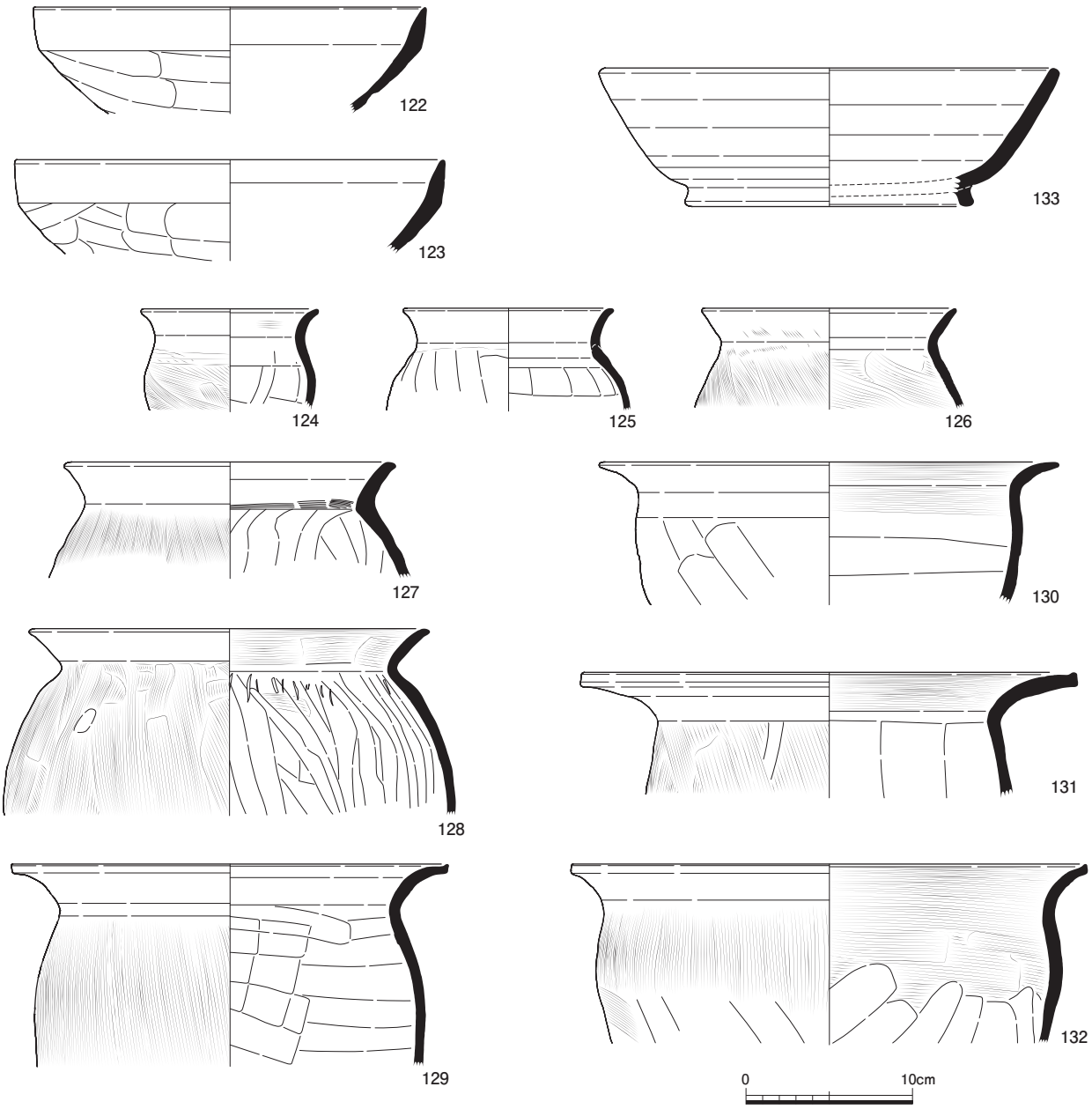

図 62　南北溝 SD1347B 下層出土土師器（2）　1：4

漸移的に推移するため明確に区分することは難しい。径高指数は、①が 24.9（88）、②の平均値が 24.4（8 点、中央値 24.7、最小値 19.9、最大値 28.6、口縁部残存率平均 31.2％）、③の平均値が 20.6（3 点、中央値 21.0、最小値 18.9、最大値 22.0、口縁部残存率平均 18.6％）、④が 20.9（103）となり、口径が大きくなるほど浅手になる傾向が概ね認められる。底部外面は、口径の大小を問わず、ユビオサエの後にナデ調整（86・87・89・92 ～ 98・102）あるいはナデのみを施すもの（88・101）が主体を占めており、ヘラケズリのみで仕上げるもの（90・103）やヘラケズリとナデを併用するもの（91・99・100）が少数認められる。87・92・94・96・97・101 の底部内面には螺旋暗文がみられる。88・96 は、内面に左上がりの一段放射暗文をもつ。87 の底部外面中央には、「又」もしくは「又」を旁にもつ字の可能性がある刻書、あるいは記号がみえる[7]。93 の内面と 102 の底部外面中央には「十」のヘラ記号が見える。97・101 の底部外面には葉脈圧痕を残す。

104 ～ 106 は杯 G。104 は明赤褐色を呈し、底部外面

に指頭痕がみられる。105・106はにぶい黄褐色あるいは暗灰黄色を呈する粗製の杯であり、強く外反する口縁部と平底が特徴的である。いずれも底部外面に指頭痕を残す。

107は杯H。口縁部が短く、やや深手である。底部外面をヘラケズリにより調整する。

108～113は皿A。復元口径は205～240㎜に収まる。底部外面を、ユビオサエ後にナデで調整するもの（108・111～113）が多く、この他に、指頭痕のみ残すもの（109）とヘラケズリを施すもの（110）がみられる。109の底部内面には螺旋暗文がみえる。

114は皿B。高台および底面の大半は欠損しているが、一部残存していた高台の剥離痕にもとづき分類した。復元口径は216㎜。外面をナデ調整で仕上げ、内面には二段放射暗文を施す。

115・116は皿H。復元口径は187㎜(115)と188㎜(116)である。底部外面をヘラケズリにより調整する。

117～119は小型の皿。口径は119～135㎜であり、径高指数は平均16.9である。いずれもにぶい黄褐色あるいは暗灰黄色を呈しており、杯Gに分類した105・106と胎土が類似する。口縁部は内外面ともにナデで調整し、底部外面はユビオサエ後にナデで仕上げる。

120・121は大型鉢。外面は、下半部にヘラケズリを施した後、口縁部から底部付近にかけて横方向のヘラミガキで仕上げる。120の口縁部外面は器面の剥離が激しいが、ヘラミガキのわずかな痕跡を観察できる。120の内面には四段の螺旋暗文を施す。121の内面には二段放射暗文がみられる。

122・123は鉢H。底部外面をやや粗いヘラケズリにより仕上げる。123は器壁がやや厚い。

124～126は小型の甕。胴部外面は、124がヨコハケ、126がタテハケにより調整する。125の胴部外面は摩耗のため不明瞭であるが、タテハケ調整が施されていた可能性が高い。胴部内面は124・125がヘラナデ、126が左上がりのハケ目により調整する。

127は中型の甕。復元口径200㎜。胴部外面を細かいタテハケにより調整し、胴部内面を縦方向のヘラケズリにより仕上げる。

128～132は、復元口径240㎜以上のやや大型の甕。胴部外面は、縦方向のヘラナデを施す130を除き、タテハケにより調整する。胴部内面は、縦方向のヘラケズリにより仕上げるもの（128）、横方向のヘラナデにより調整するもの（129・130）、縦方向のヘラナデにより調整するもの（131）、ヨコハケの後にナデを施すもの（132）がある。

ロクロ土師器（図62）　133は、須恵器の器種で杯Bに相当する。口縁部内外面をロクロナデで調整し、底部外面付近にはロクロケズリの痕跡を残す。復元口径277㎜。

須恵器（図63・64）　140～145は杯A。口径が小さいほうから、110～120㎜（140・141）、130～145㎜（142～144）、199㎜（145）に分かれる。比較的小型のものでは、底部外面をヘラ切り後に不調整とするもの（140・142）とナデを施すもの（141）がある。口径140㎜以上の資料では、底部外面をロクロケズリで仕上げる（143～145）。143は外面に薄い降灰がみられ、部分的に釉化する。145は、その形態と質感から、尾張産の可能性がある。

146～154は杯B。口径が小さいほうから、135～145㎜（146・147）、150～170㎜（148～151）、175～180㎜（152～154）に区分できる。比較的小型品では、底部外面をヘラ切り不調整とするもの（146・148・149）が目立つが、ヘラケズリとナデにより仕上げるものも稀に存在する（147）。口径160㎜以上の資料では、底部外面をヘラケズリにより調整する（150～154）。147と152の外面には薄い降灰がみられ、147では部分的に自然釉が降着する。154は、杯底面が高台よりも下方に突き出る。

134～139は杯蓋。134・135はかえりをもつ杯蓋、136～139はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、134が104㎜、135が154㎜である。134は杯Gの蓋と思われる。135は外面全体に薄い降灰がみられる。かえりをもたない杯蓋の口径は、145～165㎜（136～138）に集まるが、口径181㎜の大型品(139)も存在する。136・138の外面には薄い降灰がみられる。137の内面は全体的に黒変する。136は、その形態と質感から、尾張産の可能性がある。

155～160は椀A。口径を基準に、140～150㎜（155～157）と160～185㎜（158～160）に区分できる。図示したいずれの資料も、底部外面をロクロケズリにより仕上げる。158は、その形態と質感に鑑みて、尾張産と考えられる。161は丸底の椀。復元口径170㎜。底部外面

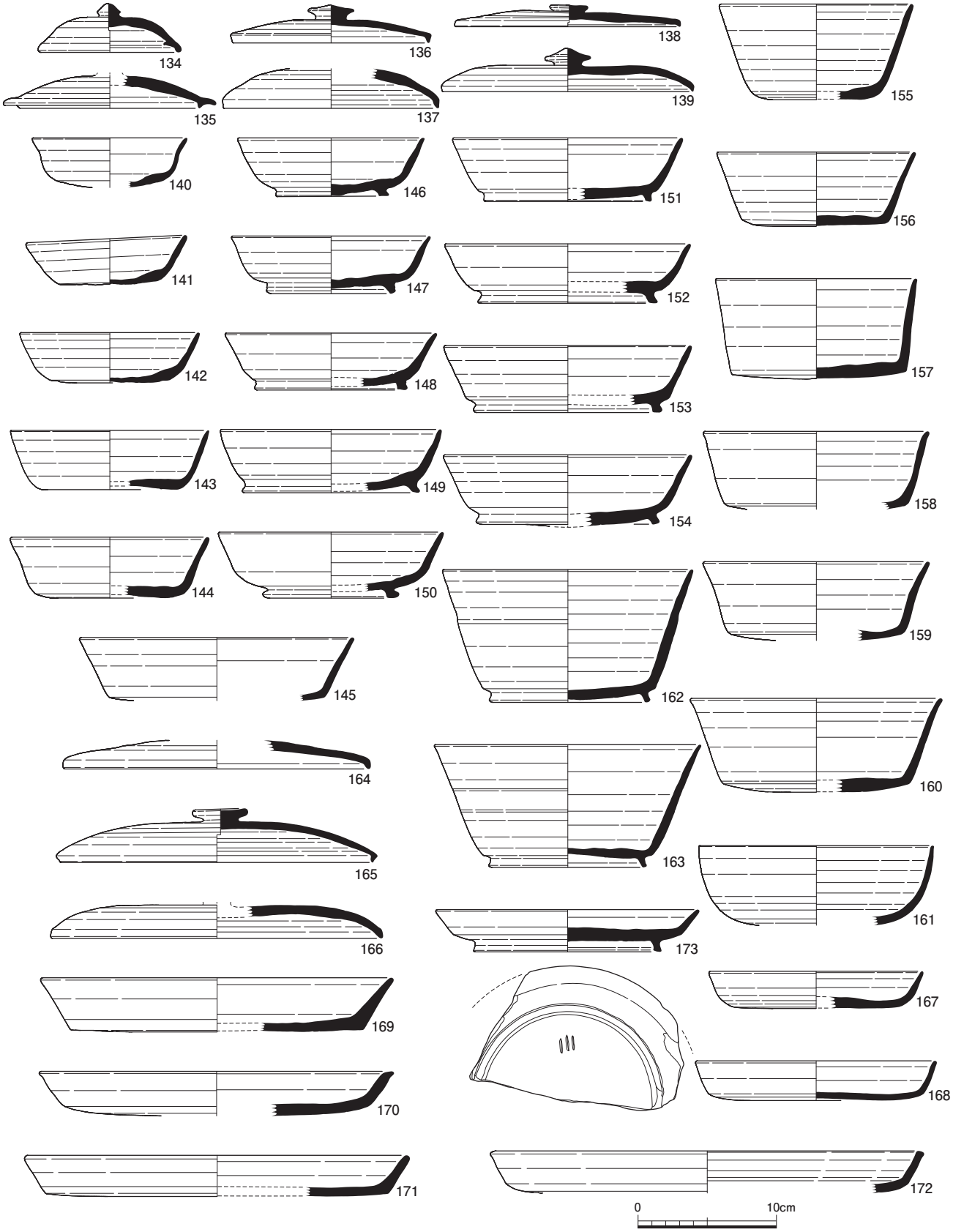

図 63　南北溝 SD1347B 下層出土須恵器（1）　1：4

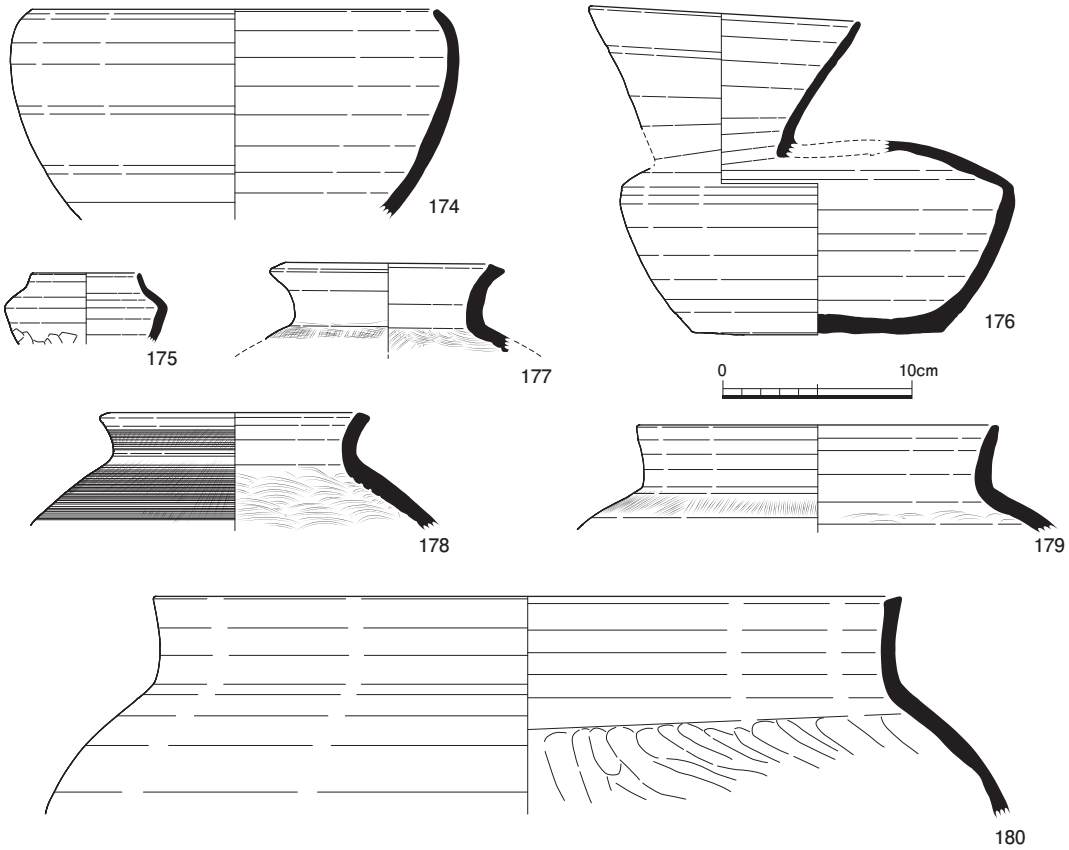

図 64　南北溝 SD1347B 下層出土須恵器（2）　1：4

をロクロケズリで仕上げる。

162・163 は椀Ｂ。口径は、162 が 178㎜、163 が 193㎜である。いずれも胴部下半から底部外面にかけてロクロケズリで仕上げた後、高台を取り付けている。

167 ～ 172 は皿Ａ。口径 155 ～ 175㎜の小型品（167・168）と口径 255 ～ 315㎜の大型品（169 ～ 172）に区分できる。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。168 の外面に薄い降灰がみられる。171 の底部内面に、磨り消された同心円状当て具痕がわずかに残る。

173 は皿Ｂ。口径は 190㎜と小ぶりである。底部外面にロクロケズリを施す。底部外面にヘラ記号あり。

164 ～ 166 は皿蓋。口径は 220 ～ 240㎜に収まる。164 の外面全体に自然釉が降着する。166 の口縁部内面には、重ね焼きの痕跡と思しき黒変がみられる。

174 は鉢Ａ。胴部外面下位をロクロケズリで仕上げる。

175 は壺Ｃ。胴部外面下半を横方向のヘラケズリで調整する。肩部外面には薄い降灰がみられ、重ね焼きの痕跡が残る。壺蓋を被せて焼成した痕跡であろう。

176 は平瓶。同一個体であるが、口頸部片と胴部片は接合しない。底部付近の胴部外面にロクロケズリを施し、底部外面には指頭痕を残す。口縁部内外面に薄い自然釉の降着がみられ、胴部内外面には薄い降灰あり。

177 は横瓶。口縁部と肩部の一部が残存する。肩部外面に格子タタキを施し、肩部内面に同心円状当て具痕を残す。外面の一部に自然釉が降着し、口縁部内面には降灰と部分的な釉化がみられる。

178 ～ 180 は甕。178 は外反する口縁部をもつ甕。胴部外面に平行タタキを施した後にカキ目で仕上げ、胴部内面には同心円状当て具痕を残す。179・180 は直立する口縁部をもつ甕。179 は、胴部外面に平行タタキを施した後に、ロクロナデにより磨り消す。胴部内面の同心円状当て具痕も、ロクロナデにより磨り消される。180 は、口縁端部が内傾する平坦面をなす。胴部外面を強めのロクロナデにより仕上げ、胴部内面にはロクロナデの後にやや不規則な左上がりのナデを施す。元来の調整痕を磨り消した可能性も考えられる。調整痕の磨り消しに鑑み、179・180 ともに尾張産の可能性がある。

5　SD1347B 上層出土土器

第 14 次調査区の SD1347B 上層から出土した土器は、整理用コンテナで 42 箱分である。破片数にもとづくと、出土土器は総計 8,679 点（土師器 6,259 点、須恵器 2,420 点）を数える。土師器に対する須恵器の出土比率は、SD1347B 下層の場合とほぼ同様である。上記のうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約 24％、計 2,056 点（土師器 1,239 点、須恵器 817 点）であった。土師器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、鉢Ａ、鉢Ｃ、鉢Ｈ、大型鉢、高杯Ａ、高杯Ｃ、高杯Ｈ、盤Ａ、貯蔵具に壺Ａ、壺Ｂ、煮炊具に甕、鍔甕、甑、竈がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約２：１である。須恵器は、供膳具に杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｇ蓋、杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯蓋、皿Ａ、皿Ｂ、皿蓋、椀Ａ、椀Ｂ、鉢Ａ、鉢Ｆ、盤、高杯があり、貯蔵具に壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｋ、長頸壺蓋、細頸壺、平瓶、瑤、提瓶、甕がある。須恵器では、供膳具の比率は全体の約 88％であり、SD1347B 下層とほぼ同様の高い数値を示す。この他、ロクロ土師器の杯小片が 15 点認められた。これらは供膳具と貯蔵具からなり、須恵器の杯Ｈ、皿、甕に相当する器種を含む。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約 18％（約 64°）、須恵器で平均約 23％（約 84°）であり、あまり良好な残存状況とはいえない。

土師器（図 65）　181･182 は杯Ａ。口径は、181 が 119㎜、182 が 183㎜であり、径高指数はそれぞれ 24.7 と 30.5 となる。いずれも底部外面にヘラケズリを施し、口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には二段放射暗文が施され、182 では底部内面に螺旋暗文がみられる。

183 ～ 187 は杯Ｃ。口径にもとづき、110 ～ 130㎜（183･184）、145 ～ 165㎜（185・186）、192㎜（187）に概ね区分できる。底部まで残存する２点の径高指数はそれぞれ、28.9（183）および 28.3（186）である。図示した資料はいずれも、底部外面をユビオサエの後にナデにより仕上げる。186 のみ、口縁部外面にヘラミガキを施す。183・185･186 の内面には、左上がりの一段放射暗文がみえる。

188 は杯Ｇ。口縁部の外反は弱く、底部外面に指頭痕を残す。

189 は鉢Ａ。底部外面をヘラケズリにより調整し、口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には暗文がみられない。

190 は鉢Ｈ。底部外面をヘラケズリにより調整する。

191 ～ 193 は小型の甕。いずれも胴部外面をタテハケで調整するが、胴部内面にヘラナデを施すもの（191・193）とヘラケズリにより仕上げるもの（192）がある。

194 は中型の甕。胴部外面をタテハケにより調整し、胴部内面は横方向のヘラナデの後、下半部をハケ目により仕上げたと思われる。

195 ～ 197 は大型の甕。胴部外面をタテハケ調整、胴部内面をヘラナデにより仕上げる。

198 は甕Ｂ。胴部中位に取り付く把手は、先端部分が欠損する。胴部外面にはやや長いストロークのタテハケを施し、胴部内面を横方向のヘラナデにより調整する。

須恵器（図 11）　204 は杯Ａ。口径は 138㎜である。底部外面をロクロケズリで調整する。底部内面の一部に降灰と自然釉の降着がみられる。

205 ～ 212 は杯Ｂ。口径が小さいほうから、140 ～ 155㎜（205 ～ 210）、190 ～ 250㎜（211・212）に区分できる。底部外面をロクロケズリにより仕上げるもの（206・209・211･212）とヘラ切り不調整とするもの（207･210）がある。

須恵器（図 66）　199 ～ 203 は杯蓋。199 ～ 201 はかえりをもつ杯蓋、202・203 はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、199 が 96㎜、200 が 155㎜、201 が 160㎜である。199 は杯Ｇ蓋と考えられる。200 の外面には薄い降灰がみられる。201 は特徴的な陣笠形を呈する。かえりをもたない杯蓋の口径は、202 が 111㎜、203 が 167㎜である。202 の外面には薄い降灰がみられる。

213・214 は椀Ａ。口径はいずれも 142㎜である。底部外面をロクロケズリにより仕上げる。213 は、その形態と質感から、尾張産の可能性がある。

215・216 は皿Ａ。口径は、215 が 162㎜、216 が 305㎜である。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。形態と質感から、215 は尾張産の可能性がある。

217 は鉢Ａ。底部付近をロクロケズリで仕上げる。

218 は壺Ａ蓋。口径は 91㎜。降灰の影響か、外面の大部分が荒れる。

219 は双耳壺。あまり見られない器種である。胴部外面を平行タタキとやや粗いカキ目により調整し、胴部内面を縦方向および左上がりのヘラナデにより仕上げる。

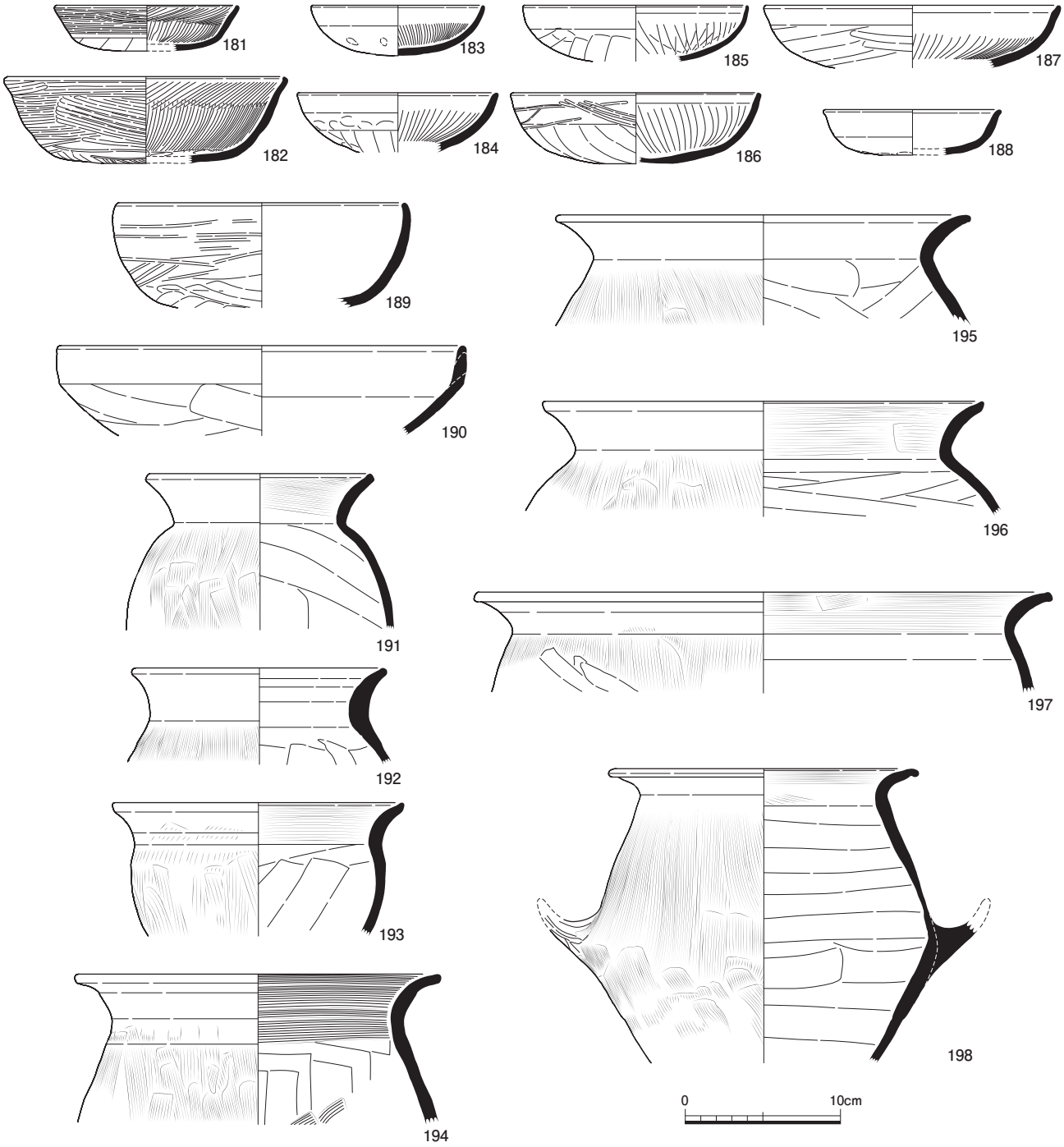

図 65　南北溝 SD1347B 上層出土土師器　1：4

把手は縦方向のヘラケズリにより調整する。胴部外面に薄い降灰がみられる。

6　SD1347 出土土器群の変遷

今回対象とした飛鳥Ⅳの土器群に前稿で報告した SD1347A 下層出土土器群をあわせて、以下では、石神遺跡における飛鳥Ⅳの土器群の統計的変遷と型式的特徴を確認しておきたい。

統計的検討　石神遺跡第 14 次調査 SD1347A・B 出土土器のうち、器種がある程度判明したものの個体数を示した（表 10）。なお、比較のため、第 14 次調査区の SD1347A 下層出土土器の個体数も右側に併記する。

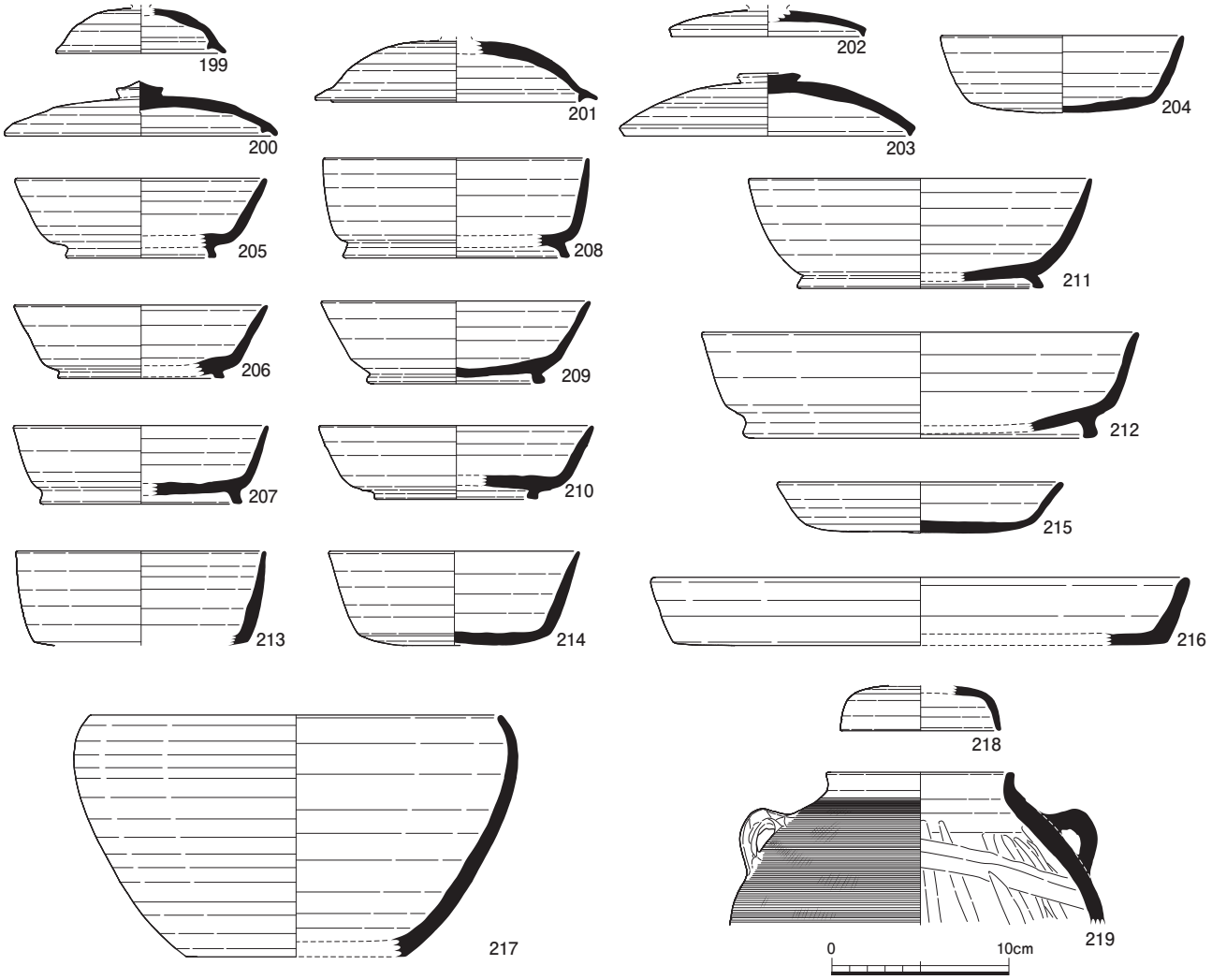

図 66　南北溝 SD1347B 上層出土須恵器　1：4

この表によれば、全体的な傾向として、須恵器の比率が徐々に増加することがわかる。具体的には、SD1347A 上層では土師器と須恵器の比率が 2.3：1 であったが、SD1347B 下層では 1.8：1 となり、SD1347B 上層では 1.5：1 にまで数的格差が縮小する。これに、前稿にて公表した SD1347A 下層出土土器のデータ（3：1）をあわせると、時期を追って漸進的に推移することが明確に理解できる。

土師器をみると、杯Ｃの出土数が概して多いことにまず目がいくが、他の杯類では杯Ｈの出土比率の推移が特徴的である。杯Ｈの供膳具全体における比率は、SD1347A 下層では約５％であるが、SD1347A 上層で 10％にまで増加する。その後は減少に転じ、SD1347B 下層で約３％、SD1347B 上層では約２％にまで落ち込む。これらのほか、高杯Ａが SD1347B において SD1347A よりも高い頻度で出土する傾向がある。なお煮炊具では、SD1347B において竈の出土が目立つ。

須恵器では、杯蓋以外の供膳具のなかで杯Ａ・Ｂが概して目立つ。杯Ｂの出土数に高台の出土数をあわせた場合にも、SD1347A・B いずれの土層においても須恵器全体の 11 ～ 12％の比率を示し、変化はみられない。もっとも多く出土した杯蓋は、SD1347A 下層・上層では全体の 17％を占め、SD1347B 下層では 21％、SD1347B 上層では 23％に増加する。また、かえりをもつ杯蓋ともたない杯蓋の比率は、溝毎に異なる。SD1347A 下層・上層では両者の比率はおよそ１：１であるが、SD1347B 下層では約１：４、SD1347B 上層では１：3.3 となり、かえりをもつ杯蓋の比率が 25％を割り込む状況がみ

表 10　第 14 次調査 SD1347A 下層・上層および SD1347B 下層・上層出土土器の器種組成

土師器（個体数）		SD1347A 下層	SD1347A 上層	SD1347B 下層	SD1347B 上層
杯・杯蓋	杯 A	11（1.4）	10（0.9）	12（0.5）	4（0.3）
	杯 B	0（0）	2（0.2）	0（0）	0（0）
	杯 B（高台のみ）	10（1.3）	19（1.7）	37（1.5）	20（1.6）
	杯蓋	15（1.6）	27（2.4）	37（1.5）	34（2.7）
	杯 A/B（細分不可）	78（9.9）	140（12.8）	353（14.3）	153（12.3）
	杯 C	228（28.8）	243（22.3）	487（19.7）	223（18.0）
	杯 G	32（4.0）	67（6.1）	143（5.8）	88（7.1）
	杯 H	27（3.4）	53（4.9）	42（1.7）	18（1.5）
皿・皿蓋	皿 A	8（1.0）	5（0.5）	35（1.4）	3（0.2）
	皿 B	0（0）	6（0.5）	10（0.4）	4（0.3）
	皿蓋	2（0.3）	0（0）	10（0.4）	3（0.2）
	皿 A/B（細分不可）	29（3.7）	63（5.8）	168（6.8）	105（8.5）
	皿 H	0（0）	0（0）	2（0.1）	0（0）
	小型皿	0（0）	0（0）	6（0.2）	0（0）
鉢	鉢 A	8（1.0）	10（0.9）	20（0.8）	8（0.7）
	鉢 B	0（0）	2（0.2）	0（0）	0（0）
	鉢 C	0（0）	1（0.1）	1（0）	2（0.2）
	鉢 H	27（3.4）	9（0.8）	41（1.7）	14（1.1）
	大型鉢	1（0.1）	1（0.1）	13（0.5）	14（1.1）
	片口付鉢	1（0.1）	0（0）	1（0）	1（0.1）
高杯	高杯 A	1（0.1）	2（0.2）	24（1.0）	11（0.9）
	高杯 C	1（0.1）	1（0.1）	13（0.5）	2（0.2）
	高杯 G	0（0）	1（0.1）	3（0.1）	0（0）
	高杯 H	0（0）	0（0）	3（0.1）	1（0.1）
	高杯脚部	63（8.0）	44（4.0）	35（1.4）	29（2.3）
盤 A		0（0）	0（0）	3（0.1）	1（0.1）
壺	壺 A	5（0.6）	0（0）	3（0.1）	3（0.2）
	壺 B	1（0.1）	3（0.3）	5（0.2）	4（0.3）
甕	甕 A	5（0.6）	0（0）	0（0）	0（0）
	甕 B	2（0.3）	1（0.1）	0（0）	0（0）
	甕 C	0（0）	0（0）	1（0）	0（0）
	甕（細分不可）	4（0.5）	8（0.7）	8（0.3）	52（4.2）
	鍔甕	0（0）	0（0）	1（0）	2（0.2）
鍋	鍋 A	1（0.1）	3（0.3）	0（0）	0（0）
	鍋 B	0（0）	1（0.1）	1（0）	0（0）
	鍋（細分不可）	0（0）	0（0）	5（0.2）	0（0）
煮炊具類口縁（細分不可）		174（22.0）	280（25.6）	751（30.4）	344（27.8）
煮炊具類把手（細分不可）		36（4.6）	53（4.9）	87（3.5）	78（6.3）
甑		14（1.8）	20（1.8）	32（1.3）	8（0.7）
竈		10（1.3）	17（1.6）	81（3.3）	55（4.4）
計		**794（100）**	**1092（100）**	**2474（100）**	**1239（100）**

*1　（　）内は各溝出土土器群内での％（小数点第二位を四捨五入）を表す。
*2　土師器・須恵器ともに杯椀類・甕類の底部片・胴部片は除外している。

須恵器（個体数）		SD1347A 下層	SD1347A 上層	SD1347B 下層	SD1347B 上層
杯	杯 A	18（7.0）	23（4.9）	52（3.7）	19（2.3）
	杯 B	13（5.0）	14（3.0）	35（2.5）	18（2.2）
	杯 G	0（0）	1（0.2）	0（0）	0（0）
	杯 H	0（0）	6（1.3）	4（0.3）	4（0.5）
杯蓋	杯 G 蓋	7（2.7）	7（1.5）	9（0.6）	2（0.2）
	杯 H 蓋	1（0.4）	4（0.8）	11（0.8）	5（0.6）
	杯蓋（かえり有）	25（9.7）	38（8.0）	60（4.3）	43（5.3）
	杯蓋（かえり無）	20（7.7）	40（8.4）	236（16.8）	146（17.9）
	杯蓋（細分不可）	13（5.0）	14（3.0）	15（1.1）	45（5.5）
杯・椀口縁部（細分不可）		66（25.5）	139（29.3）	505（35.9）	264（32.3）
杯・椀高台（細分不可）		15（5.8）	38（8.0）	129（9.2）	75（9.2）
皿・皿蓋	皿 A	2（0.8）	5（1.1）	18（1.3）	7（0.9）
	皿 B	0（0）	1（0.2）	11（0.8）	7（0.9）
	皿蓋（かえり有）	0（0）	0（0）	2（0.1）	1（0.1）
	皿蓋（かえり無）	3（1.2）	5（1.1）	23（1.6）	6（0.7）
	皿 A/B（細分不可）	5（1.9）	7（1.5）	12（0.9）	8（1.0）
椀	椀 A	7（2.7）	4（0.8）	17（1.2）	7（0.9）
	椀 B	0（0）	0（0）	4（0.3）	3（0.4）
鉢	鉢 A	5（1.9）	5（1.1）	27（1.9）	13（1.6）
	鉢 D	0（0）	1（0.2）	0（0）	0（0）
	鉢 E	1（0.4）	2（0.4）	2（0.1）	0（0）
	鉢 F	0（0）	1（0.2）	13（0.9）	6（0.7）
	鉢（細分不可）	1（0.4）	1（0.2）	10（0.7）	10（1.2）
盤		1（0.4）	2（0.4）	8（0.6）	10（1.2）
高杯	高杯	4（1.5）	2（0.4）	14（1.0）	10（1.2）
	高杯脚部	15（5.8）	18（3.8）	31（2.2）	13（1.6）
壺	壺 A	4（1.5）	1（0.2）	2（0.1）	4（0.5）
	壺 A 蓋	3（1.2）	3（0.6）	6（0.4）	8（1.0）
	壺 B	2（0.8）	0（0）	3（0.2）	3（0.4）
	壺 C	0（0）	0（0）	4（0.3）	2（0.2）
	壺 K	0（0）	0（0）	15（1.1）	2（0.2）
	長頸壺蓋	0（0）	0（0）	1（0.1）	2（0.2）
	細頸壺	0（0）	6（1.3）	0（0）	3（0.4）
	壺（細分不可）	6（2.3）	31（6.5）	8（0.6）	19（2.3）
平瓶		2（0.8）	11（2.3）	30（2.1）	12（1.5）
瓶		4（1.5）	2（0.4）	4（0.3）	1（0.1）
横瓶		1（0.4）	1（0.2）	1（0.1）	0（0）
提瓶		0（0）	0（0）	2（0.1）	2（0.2）
甕		15（5.7）	41（8.7）	134（9.5）	37（4.5）
計		**259（100）**	**474（100）**	**1406（100）**	**817（100）**

られる。鉢 F は出土数が少ないものの、SD1347B において比較的高い頻度で出土する傾向がある。貯蔵具では、平瓶の存在がやや顕著であり、SD1347A 上層をも含むこれより上の層位において出土数が多い。とくに SD1347B 下層では、平瓶は貯蔵具全体（158 点）の約 19 %も占めている。

型式的特徴　土師器杯 C および須恵器杯 A・杯 B に絞って、今回扱った石神遺跡第 14 次調査 SD1347A 上層および SD1347B 下層・上層出土土器群の型式的特徴をおさえ、SD1347A 下層出土土器群と比較する。

土師器杯 C は、SD1347A 上層では口径 150㎜以上の中・大型品において底部外面のヘラケズリが主に認められるものの、全体的にオサエのみによるものが目立つ。SD1347B は下層・上層ともに、口径に関わらず底部外面をオサエとナデにより仕上げるものが主体を占める。SD1347 下層では、口径 130㎜程度の小型品と口径 150㎜程度の中型品の中に底部外面にヘラケズリを施すものが少数存在するが、SD1347B 上層には底部外面をヘラケズリするものは存在しない。口径 140㎜以上の中・大型品の径高指数は、SD1347A 上層で平均 24.7（3 点、中央値 24.5、最小値 23.5、最大値 26.1）、SD1347B 下層で平均 22.6（5 点、中央値 22.0、最小値 18.9、最大値 26.2）を示す。

SD1347A 下層が平均 24.2（13 点、中央値 23.7、最小値 19.3、最大値 32.9）であることから、径高指数が低下する（浅手化する）方向に漸移したとはただちに評価はできない。しかし、SD1347A から SD1347B にかけて浅手化が進むことは指摘できるだろう。

須恵器杯Ａは、SD1347A 上層において口径 110㎜未満の小型品が目立つが、SD1347B 下層では口径 110㎜未満の小型品が欠落して口径分布が平準化する。底部外面は、口径 130㎜未満の小型品でヘラ切り不調整あるいはナデ、口径 130㎜以上ではロクロケズリによる調整の頻度が高い傾向は SD1347A 下層出土の資料でも認められ、SD1347A および SD1347B で相違がみられない。

須恵器杯Ｂは、須恵器杯Ａに比べて概して大きい傾向がある。SD1347A 上層では口径 100 ～ 180㎜程度の個体、また、SD1347B 下層では口径 130 ～ 180㎜の個体（主体は口径 150 ～ 170㎜）がやや漸移的にみられる。これに対して、SD1347B 上層では口径 140㎜未満の個体が欠落し、口径 140 ～ 160㎜の個体を中心に口径 190㎜超の個体が少数みられるようになる。なお、SD1347A 下層出土の須恵器杯Ｂも口径 140 ～ 160㎜に集中するものの、口径 140㎜未満の個体もみられた。以上から、SD1347A から SD1347B にかけて、杯Ｂの口径は大型化したとみてよさそうである。

7　おわりに

石神遺跡第 14 次調査 SD1347A・B 出土土器群は、時間的先後関係にある。その推移一般を特徴的に示すのは、統計的には須恵器の比率の漸増やかえりのある杯蓋の漸減、土師器高杯Ａの増加、型式的には土師器杯Ｃの浅手化と調整の簡素化、また、須恵器杯Ａ・Ｂの相対的な大型化（小型品の欠落）であった。こうした諸変化は、石神遺跡第８・９次調査 SD1347A・B 出土土器や、Ｂ期整地土と SD640 出土土器の間でもほぼ同様に認められ、石神遺跡Ｂ～Ｃ期における一般的なトレンドであったと解釈できる。他方で、第 14 次調査 SD1347A では土師器杯Ｈ、第 14 次調査 SD1347B では竈がより多く、第８・９次調査では SD1347A･B ともに土師器皿Ａ、SD1347B においてのみ須恵器皿Ａがより多くの比率を占めるなど、調査区間での傾向差もまた認められた。

各器種の一般的な変化は、石神遺跡を含む宮都への土器の供給元の変化や、宮都での需要の増大にあわせた生産工房における土器製作法の最適化過程などを反映していると考えられ、７世紀後半から末にかけての複雑で動態的な土器生産・流通システムの一端を、そうした変化に見出すことできるだろう。また、調査区間にみられた器種組成のわずかな差異は、溝の近傍に所在した施設の機能差を暗示している。したがって、以上の諸傾向は単純な型式変化とはみなしえず、石神遺跡の歴史的変遷や各時期の社会的・経済的位置づけを十分に理解しない限り、適切に読み解くことは叶わない。このような大きな課題は、総合的な視野に立った継続的な研究により、将来あきらかにされるべきである。　**（山藤正敏）**

註

1）尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』。尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」『紀要 2017』。森川実・大澤正吾「石神遺跡Ｂ期整地土・SD640 出土の土器群－石神遺跡第３～５次・第 10 ～ 12 次」『紀要 2018』。土橋明梨紗「石神遺跡 SK1244・1245・1246・1247 出土の土器群－石神遺跡第７次」『紀要 2019』。土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器－石神遺跡第３～８・11 次」『紀要 2020』。山藤正敏「石神遺跡 SD1347・1476 出土の土器群－石神遺跡第８・９次」『紀要 2021』。山藤正敏「石神遺跡 SD1347A 出土の土器群･木簡－石神遺跡第 14･15 次」『紀要 2022』。

2）前掲註１山藤「石神遺跡 SD1347A 出土の土器群・木簡－石神遺跡第 14・15 次」、註４（126 頁）。

3）本報告は、SD1347A 上層とみなしえる土層のうち、石神遺跡 A3 期の南北石組溝 SD900 に対応する「南北溝②」として掘削された土層の一部から出土した土器は除外している。これは、当該土層の帰属時期が今もなお不確定と考えられるからであり、これらの土層を SD1347A 上層と確定するためには、当時の調査資料のさらなる検証が必要である。

4）本報告で扱う「下層」には、SD1347B を指す「南北溝①」の「下層」および「中層」のほか、「南北溝①」（取り上げ土層未記載）も含んでいる。取り上げ土層未記載の「南北溝①」は、２件を除いて「南北溝①上層」の掘削日（2001 年７月 27・30 日）以降の取り上げ日を示していることから、取り上げ土層未記載の「南北溝①」は実質的に「南北溝①中層」および「南北溝①下層」と同義であると判断した。したがって本報告では、取り上げ土層未記載の「南北溝①」出土土器を、SD1347B 下層出土土器として扱うことにする。

5）破片数のカウントは、接合関係をあきらかにした上で、確実に同一個体と考えられる破片をまとめて「1 点」とした。詳細については、前掲註１山藤「石神遺跡 SD1347・SD1476 出土の土器群－石神遺跡第８・９次」『紀要 2021』、註５（139 頁）を参照。

6）本稿でいう「口径」とは、口縁部外端で計測した直径を指している。なお、かえりをもたない杯･皿蓋については、下方に折り返した口縁端部の外縁で「外端径」を計測した。

7）図 61 の 87 にある刻書の釈文は史料研究室による。